

事例で考える心と人生の問題④

おんなの子・

おとこの子を育てる

—学童期・青年期の子どもの世界を理解する—

筆者は六月号(八八号)の執筆者である東北大学長谷川啓三教授に師事し、精神科・心療内科心理療法士、スクールカウンセラー、児童養護施設カウンセラー、神奈川県警被害者支援スタッフ等々、臨床活動を行ってきました。

しつちやかめつちやかな
現場に有効

人生いろいろ仕事もいろいろ立場もいろいろでしたが、振り返ると自分がいた現場にはある特徴があります。「ひどい現場は長谷川研でトレーニングを

受けた学生が得意だよね」というコンセンサスが周りにありまして、年度途中でカウンセラーが辞めた荒れた学校、難問山積の精神科、児童相談所等の仕事が回されてきました。「至急長谷川研究室の学生でかつ頑丈な方を」との電話がよくかかってきたのを思い出します。

長谷川啓三先生が日本に紹介したソリューション・フォーカスト・アプローチをはじめとする短期／家族療法は、本場アメリカでもわりに荒れた現場を得意とします。問題がドーンとあつて

皆が右往左往しているケースや(アメリカなら暴力や麻薬問題、日本なら家庭内暴力や不登校など)、問題に多くの人間が関わっているケース(組織の問題や多世代同居家族問題など)、周囲が困っているものの問題の本人は自覚が全く無くカウンセリングにも来るわけが無いケースなどが得意分野です。

「問題の原因」と「解決の糸口」実は関係ない?!

短期／家族療法の一歩の特徴は、「問題の原因」を追究しないというこ



生田 倫子

慶應義塾大学先導研究センター研究員

【いくた みちこ】北海道生まれ。東北大学大学院教育学研究科博士課程修了、教育学博士、臨床心理士、家族心理士。病院臨床、学校臨床、施設臨床、武蔵野大学専任講師を経て現在慶応大学先導研究所研究員、東京成徳大学大学院心理学研究科講師。臨床活動として私立高校スクールカウンセラー、児童養護施設カウンセラー・コンサルタント、神奈川県警察本部被害者支援業務委託カウンセラー、など。共著に『学校臨床ヒント集』『事例で学ぶ家族療法・短期療法・物語療法』、『脱学習のブリーフセラピー』ほか。

とです。私たちは「問題の原因」と「解決」が結びつかないという事例を多数体験しています。たとえば、友達からのいじめにあつて不登校になった子どもが、好きなアーティストのコンサートに行つた次の日から登校するようになったケース、素行の悪い友達の影響で非行に走つた少女が、両親が仲良く毎日肩もみをするようになったらまともになったケースなど枚挙にいとまはありません。

しかし、ここところが一番釈然としないポイントであるようです。問題が起こると「原因は何だろう??？」と考え、それを除去しようと考えるのが自然な思考パターンなのでしょう。ひどいおなかの痛み↓盲腸が見つかった↓手術で除去↓治つた、というようなモデルが一番しっくりくる。このように、原因と結果には因果関係があるとして、その原因を模索するタイプの思考を、「直線的因果論」といいます。この人間の自然な思考パターンに短期／家族療法の考え方はそぐわないため、しっくりこないポイントとと思います。ですので、以下掘り下げてみることにします。

「問題のある子」なら

「親も問題あり」?

長らくカウンセリングに携わつてい

ると、「カウンセラーをされている方は、上手に子どもを育てることが出来るのでしょうね。」と聞かれることがあります。この「上手に」という言葉が意味するところは、「問題を抱えたりグレたりせず、前向きな人生を送れる（優秀な）子どもを育てることが出来る」ということでありましょうか。

この質問の背景には、「問題を持つ子どもの親は問題がある。」よつて「専門家である教員やカウンセラーは問題が無いはず、よつて子どもは良く育つだろう。」という、仮説があるように思えます。

直線的因果論に基づけば、「いい親なら子どもも良く、悪い親なら子どもも悪い」という図式が成り立つでしょう。事実、少年の犯罪が起こると（親の育て方が悪かつたのでは）という論調をよく耳にします。明らかに親に問題があれば納得し、問題が無ければ「表には見えないけれど問題があつたのだろう」というコメントがなされます。このような直線的因果論は世論を納得させます。

しかし、事例に携われれば携わるほど疑問が沸くようになります。非常にネガティブな養育環境にいたのに、本当にしつかりとした優しい良い子であることもあります。反対に多くの問題を抱えた子どもの両親が、愛情深く思い

やりのある素材な仲のよい両親であることもあるのです。このような場合、裏では？などと詮索してしまいがちですが、いいものはいいいという現実に突き当たります。

確かに問題を持つている子どもの親になにかしら問題が見当たると割合は、問題が無い家庭よりは多いかもしれませんが。しかし、おそらく世間一般が思つているほどではないのです。

援助交際をする子の親は？

短期家族療法にフィットするケースとして一例を挙げると、女子児童の援助交際のようなケースがあります。というのも、本人自身が来るのが少ないため、パニック状態の母親のみの相談から始まり、次に父親もいやいやながら面接にやつてくるという経過をたどります。両親は本人を面接に來させて心を入れ替えさせてほしいと望みますが、いかんせん来ません。そこで両親と面接して間接的に女子児童に影響を与えていく試みを行います。

筆者はかねがね、援助交際という問題を抱える女子児童には二つパターンがあると感じています。一つは、親が放任、無関心、無責任ですさんでいるというタイプ。もう一つは、金銭的にも不自由の無いしつかりとした家庭環境、愛情を注ぐ両親、いわゆるいい環

境にいる子、といえます。前者に関してはさもありなんということで理解がたやすいのですが、後者の場合にはまさしく青天の霹靂、「なぜうちの子が、どうして？なにが悪かったんでしょか。」とパニック状態になります。

前者のタイプの子はどこか寂しそうな表情がありますが、後者のグループは自分に自信があり堂々としているように見え、会話も自己分析や相談等、頭もよく積極的な印象です。

【事例】

中高一貫の私立女子高に通う高校二年生のA子。成績は中程度で清楚な印象です。

A子の母親から面接依頼がありました。絶対に学校や担任に言わないことを確認後、「実は娘の素行がおかしいので財布を見ると一〇万入っていた。」お金の出所を問い詰め、援助交際を疑うと否定しなかった。父親に相談すると逆上し、娘ではなくむしろ母親の養育方法を責め立てられている、とのことでした。

母親は専業主婦で、子どもは兄と本人の二人兄妹。一流企業に勤める仕事熱心な父親と、家庭的でやさしい母親、兄は一流大学と、まさに絵に書いたような「一般的な上流家庭」という雰囲気です。

問題の背景

娘が援助交際をしているとわかった時、特に何不自由ない家庭の場合の父親の衝撃は計り知れません。多くの場合、やはり直線的因果論に基づいて母親を責めたり学校を責めたりしています。母親にも言い分があり両親でもめている間に、問題はさらに根を深めていくことが多いものです。

特に問題が無い家庭の場合、まさしく「はまっちゃった」という言葉がびつたりのケースが多くあります。いろいろな状況が積み重なり、気がついたら穴に落ちていて出られなくなってしまう。

まった、というケースです。自分でも悪いと思っているものの、穴の上では両親がお互いを責め合って大喧嘩しているのです、ますます出にくくなるのでしよう。

先ほどのA子の事例への介入

母親と父親がもめていては、ますます事態は悪化することが見込まれたため、父親も面接に参加してもらいました。父親も仕事の合間に時間を割きカウンセリングに来てくれました。これまでの父親の対応は、娘を叱り飛ばし、娘の前で妻も叱るというものでしたが、娘にこのように褒めてもらうようにお



願いました。父親としては、ネガティブな状況を褒めるのには混乱したようです。本当はいけないと思ってるので褒められたから続けるということはありません。

父親は、母親から聞いていたこと、「ヤバ目の人と会った時、携帯電話の番号を教えなかったのは偉いね」「薬物を勧められたときに断れたのは本当に偉いね」などと褒めてみました。すると、ふてくされていたA子は泣き出し、次第に本当は悪いと思ってること、でも一回やってしまえばもう最低な自分に変わりはないと思っていたことを語りだしました。

そして、兄が一流大学に受かり両親ともども喜んでいたので、自分も一流大学にいかないとならないと強く思っていたこと、しかし成績は中堅の大学程度なのでむしろくしゃしていたこと、どうせ親を失望させるなら自分なんかどうでもいいと思いつつ始めました。

父親は、娘と本音で向き合うことが出来た、これで問題は収まるだろうと思っていました。が、(援助交際は収まったようですが)依然として夜家を抜け出すことはよくありました。

そこで、「例外探し」。両親から話を聞くと、「そういえばたまたま父親が早く帰宅し家族そろって夕飯を食べた

日は家を抜け出さなかった」などの例外が聞かれました。なので、家族そろって何かをする機会を増やすこと、それが難しい場合には「父親がこういってたよ」と母親が父親のポジティブな情報を本人に伝える、など工夫を行いました。

そうこうするうちに、A子の家からの抜け出しは無くなり、雰囲気も落ち着いてきて問題はなくなりました。

援助交際に走ってしまう原因は多種多様の混合ですが、「原因の除去＝問題の解決」とはなりません。この事例の場合父親が娘と関わるることによって改善しましたが、「これまで父親の関わりが少なかったから問題が起こった」というほど単純でもありません。

このような状況で、多くは子どもに對してせいっぱい叱ったり嘆いたりするわけですが、これが逆効果につながる場合もあります。一回やったら最低。だから、一回も一〇〇回も一緒にあるという論理の罪悪感を植えつけ、かえってエスカレートさせてしまう場合があります。社会的な地位が高い親を持つ子どもであれば、特に「親について自分ではないなければならない」「親の期待に背いてはならない」「褒められる自分ではないならない」などと思いつている場合があります。重

要なのは、親はどのようなメッセージを発しているつもりはないけれど、という場合が多いこと。親の「つもり」と子どもの「察し」の誤解は多いものです。

重要なことは、ここで踏みとどまっているというその子なりの「粹」を見つけない、など。この踏みとどまりを褒めてあげることが大切です。なかなか難しいことですが。

いろいろないても家族が大事

子どもの問題の原因はさまざまであっても最後の解決はやはり家族の力で行われることが多いのではないかと思います。

そして、父親と母親というのは子どもにとって「基地のような存在」です。この二人の人間関係は少なからず影響を及ぼします。次に、学童期の男子の事例をご紹介します。

【事例】

小学校五年生男児A君。家族構成は、父、母、A君、三つ下の弟、祖父、祖母、の六人家族。

小学校三年生の頃から母親に「デブ」「死ね」などの暴言を言うようになり、エスカレートする傾向にありました。最近では、母親はA君の言葉に

おびえるようになり、何を言われても悲しそうに黙っていることがほとんど。このままでは、中学校に入ったら家庭内暴力にエスカレートするのではないかとこの主訴でした。

A君の母親への暴言に対してどのように対応しているかを父親に聞くと、ほとんどの場合放置しているが、たまに見かねて「オイ」というと母親にからむのを止めるとのこと。父親は腕力も強く、A君も逆らえない分、かえって母親の方に当たっているのではないかとこのことでした。

子どもが夫婦仲をどのように見ているか聞くと、「ずっと父方の祖父母と同居してきましたから、仲のいいところを見せるというのに照れがあり、子どもや祖父母が居る前ではよそよそしいかもしれません。」と言いました。そこで、次の介入を提案しました。

①父と母で出かける。機会がなければ、両親で相談室に来ているのを子どもに内緒にして、帰宅後「楽しかったね。」などと言いついてみる。

②A君が暴言を言ってきたら、母親は黙ってうつむくのではなく、「お父さんに言つよ」と言い返してみる。

次回面接に至る前に母親から電話があり、状況が解決したとの連絡でした。

早速カウンセリングから両親が帰宅した際に、A君の前で「楽しかったね」「ウフフ」などと演技してみたこと。するとA君の弟が「どこに行ったの？」と聞いてきたため、「デートだよ。」と答えたところ、明らかに驚いていたこと。祖父母も驚いていたようだが、気にしなかったと述べました。

その日A君は母親に暴言を言うことはありませんでしたが、翌々日に機嫌が悪くからんできたそうです。その際に「お父さんに言うよ」と返してみたところ、エスカレートせず、ぷいと自室に引っ込んだとのことでした。その後も暴言の回数自体が激減したそうです。何よりの変化は、以前はうつ気味にも見えた母親の声明るくなっていったことが印象的でした。

子どもが学童期に入ると、父親は仕事、母親は家事育児などと役割が分れ、コミュニケーションが減ることが多くなるとの研究があります。それに伴い父母関係が「分業体制」になっていき、共同作業が減っていくということが「冷えた雰囲気」につながることもあります。

問題の対応を通して両親の連合が作られると、コミュニケーションのパターンが変化することに加え、「両親の仲が良い」「家族が安定している」と

いうメッセージを伝えるところが、良好な状態に向かう素地を作るのであらうと思われまます。

子どもの問題はもちろん無いほうがいいと思われるかもしれませんが、「子どもの問題が家族を作る」とも言えるのではないかと思えてなりません。

最後に、もし家族に問題が起こったらどこに相談すればいいのかわからないのですが、そのような疑問に対応するために筆者が開設している【家族心理.com】というサイトがあります。検索サイト等で、「家族心理」と入力すると上位に出てきます。そちらの「どこで受けられるの？」（全国家族療法相談機関一覧）をご覧ください。

【参考文献】

- (一) 長谷川啓三・若島孔文編 事例で学ぶ家族療法・短期療法・物語療法事例集 金子書房 二〇〇二
- (二) 若島孔文著「よくわかる短期療法ガイドブック」金剛出版 二〇〇一

【参考サイト】

【家族心理.com】心の問題を家族・対人関係の視点から考えるサイト
<http://www.kazoku-shinri.com/>